



一途に塗つては研ぎ、艶を生む。

京漆器 塗師

ぬ
し

高木 望 氏

きつかけは?

古都・京都の伝統工芸品、京漆器。深い味わいと優雅さを醸し出す漆は中世の室町時代以降、茶の湯文化とともに大きく栄え、今なお全国の漆器産業の中心的な立場を担う。

高木望さんは、京漆器塗師となるために研鑽を積む若き職人。高校卒業後に進んだ京都伝統工芸大学校で、漆と出会った。

高木「もともと日本の伝統文化に関心があり、その継承に貢献したい」という気持ちからこの道を選びました。数ある伝統工芸の中から漆に決めたのは、海外の工芸にはない艶や深みであつたり、質感にほれ込

んだからです」

今後の抱負は?

高木「コツコツ何かをするのが好きで、細かな作業も苦になりません。夢は、当たり前のことを当たり前にできる職人になることです」

見極めるべく、部屋を暗くして作業を行うが、それでも埃が入らないことはない。漆が固まる前に埃を取り除いては塗り直すという作業を埃がなくなるまで反復する。わずかなむらも許されない。日本が世界に誇る、京漆器ならではの艶や質感を生み出すのは地道で、繊細な手業なのだ。

京漆器は、京都山科特産の粉を混ぜた漆や鉄分を含んだ黒い漆など、幾つもの漆が塗られることで優美さを生む。

塗師の仕事は35の工程にも及び、また一つの作業にも忍耐力を要する。湿気の多い風呂で漆を乾燥させ、砥石や炭で研ぎ、再び漆を塗るという過程を繰り返す。研ぎだけ数日を要することもあるという。

仕上げは埃との戦いとなる。空気中の埃



Nozomu Takagi

1984年岐阜県生まれ。京都伝統工芸大学校で漆芸を専攻し、卒業後に京都市山科区にある「表完工房」に入社。京の名工として表彰された経歴を持つ川瀬表完氏に師事し、以来修業に励む。



京漆器(きょうしき)

794年の平安遷都により、奈良から京都に漆文化が伝わることで花開く。室町時代以降は茶の湯文化と密接に関わり、抹茶を入れる棗、菓子器、盆などさまざまな形で茶道に用いられた。防水・防腐効果を備え、耐久性にも秀でる。

千二百年も前から続く伝統の世界に飛び込んだ若き職人は、これからも努力を重ね、その技術をより発展させるに違いない。明日への扉を開け、また一步、夢に近づく。

※2015年10月取材。掲載内容は取材当時のものです。

Web版

パソコンやタブレットでもご覧になれます。
今回ご紹介した方を含め、他にも多数の若者たちをご紹介しています。

アットホーム明日への扉

検索

SNS配信

Facebook <https://www.facebook.com/AthomeTobira>
Twitter <https://twitter.com/AthomeTobira>



最新号のご案内

好評公開中

No.095

南部鉄器 鉢鍛冶
菊池 翔 氏
(岩手県)

TV番組

ディスカバリー・チャンネル(CS)

冠番組「アットホーム presents 明日への扉」放映中
毎週金曜日 22:53~23:00



ビジョン

ANA国際線「SKY CHANNEL」にて放映中